

# 心の中の「イムジン河」

沼尾 利郎

## 1 マイナー・フォークソング



新宿西口地下の反戦フォーク集会(1969年)

私が中学高校時代を過ごした1970年(昭和45年)前後はベトナム戦争が激しさを増して学生運動や反体制デモが日常的にあり、社会全体が騒然とした時代でした。中学の頃から深夜放送を聴くようになり自然とフォークソングが好きになったのですが、多くのヒット曲の陰で今でも気になるマイナーフォークがいくつかあります。その1つが「不思議な日」という曲であり、シンプルで透明感のある歌詞と無常観を漂わせた独特のメロディーと歌唱が奇妙な既視感を生み出していました(作詞:松山猛 作曲/歌:加藤和彦)。

そよぐ風には	さわやかな音
花達は咲き	野原を染めた
ふしぎな	春の日

白い雲なみ	踊りながらも
天使や鳥に	すがたを変える
ふしぎな	夏の日

果実は割れた	風の詩人は
星から星へ	すがたを変える
ふしぎな	秋の日

眠りはいつも      あたたかいもの  
雪はおどけて      街をかくした  
ふしぎな              冬の日

不思議といえば浅川マキの「赤い橋」という曲も意味深な歌詞で暗くて寂しく、主義主張の明確なメッセージソングが多かった中で妙に心に引っ掛かる歌でした（作詞：北山修 作曲：山本幸三郎）。

不思議な橋が      この町にある  
渡った人は      帰らない  
昔むかしから      橋は変わらない  
水は流れない      いつの日も

.....

いろんな人が      この町を出る  
渡った人は      帰らない  
みんな何処へ行った      橋を渡ってから  
いつかきっと私も      渡るのさ

.....

中島みゆきや山崎ハコが登場する前の時代で“暗くて怖い歌手”といえば、何ととってもこの人（浅川マキ）が一番でしょうね。

## 2 イムジン河



イムジン河こと臨津江

1968年、当時の人気フォークグループ「ザ・フォーク・クルセダーズ」（フォークル）のデ

ビュー第 2 弾の予定が急きょ発売中止となった「イムジン河」は、時代や政治に翻弄された伝説のフォークソングです。この曲は南北分断という朝鮮半島の悲劇をテーマにした望郷の歌（朝鮮民謡）と思われていましたが、実際はれっきとした作者のいる北朝鮮の曲であり、歌詞の内容も北が優れていることを誇示するものでした。このため朝鮮総連の強い抗議を受けたレコード会社は政治的配慮から発売中止とし、以後は事実上の放送禁止となっていました。

イムジン河水清く　　とうとうと流る  
水鳥自由にむらがり　　飛び交うよ  
わが祖国南の地　　想いははるか  
イムジン河水清く　　とうとうと流る

北の大地から　　南の空へ  
飛び行く鳥よ　　自由の使者よ  
誰が祖国を 2 つに　　分けてしまったの  
誰が祖国を　　分けてしまったの

.....

叙情性の高い美しいメロディーのこの曲は、後に映画「パッチギ！」の劇中曲として使われよく知られるようになりましたが、「帰ってきたヨッパライ」の大ヒットでコミックバンドとされていたフォークルが人間の自由や平和、民族差別や祖国分断などをテーマとした曲を歌うことがとても意外で、長く記憶に残ってきました（日本語詞：松山猛　編曲：加藤和彦）。

### 3 無知と差別と偏見と



フレディ・マーキュリー

差別といえば、映画「ボヘミアン・ラブソディ」の主人公フレディ・マーキュリーは移民（ペルシャ系インド人）・宗教（ゾロアスター教）・性的マイノリティ（バイセクシャル）そして病気（エイズ）という様々な差別や偏見、古い価値観に苦しみながら、20世紀最大のチャリティー音楽イベント「ライブ・エイド」（1985年）では観客と一体となり圧巻のパフォーマンスを演じました。彼が罹患したHIV（エイズ）やハンセン病は過去に差別されてきた病気の代表ですが、結核もまた社会から差別され偏見を持たれる病気として、患者やその家族は孤立や疎外への不安に苦しんできました。「周囲に噂され嫌われる病気」「人には話せない病気」として、社会的汚名や人権侵害の歴史があったのです。肺病の患者がいると親は子供に「あそこの子とは遊ぶな！」と言ったり、結核の出た家の前を鼻をつまんで走って通り過ぎたのも決して遠い過去のことではありませんでした。

差別は偏見に基づいており、偏見の裏には無知と恐怖があります。差別、偏見、思い込み…、私たちの周囲には（そして心の中にも）目に見えない「イムジン河」が今でもたくさん存在しているのではないのでしょうか。

（宇医会報 平成31年4月号掲載）